

Ozawa Ichiro May 24, 1942
 Time: 12:00PM Zone: 9:00 DST: 0
 TOKYO
 Longitude: 139E46 Latitude: 35N43 CurPer: Ju/Mo/Ma
 Lahiri Ayanamsa: 23:03 365.25 Day Year

Ve 26:53		Se 8:59 Su 9:17	Me 0:24 Ju 3:05 Ma 24:01
Ke 16:25			
			Ra 16:25 Ac 19:56 Ma 16:01

As 16:56	Le	Vimshottari Dashas
Su 09:17	Ta	Ve May-24-1942
Mo 18:01	Le	Su May-15-1955
Ma 24:01	Ge	Mo May-15-1961
Me 00:24	Ge	Ma May-15-1971
Ju 03:05	Ge	Ra May-15-1978
Ve 26:53	Pi	Ju May-14-1996
Sa 08:56	Ta	Sa May-14-2012
Ra 16:25	Le	Me May-15-2031
Ke 16:25	Aq	Ke May-14-2048

Su Ve Sa		Ma	
Ke			
			Ma
		Ma Ju	As Mo

小沢一郎辞任劇について

小沢一郎が4日午後に党本部で緊急記者会見し、辞任の意向を表明したが、7日午後、辞意を撤回した。この突然の辞任表明に民主党は混乱したが、民主党執行部は辞任表明を受理せず、慰留に努め、それで事態が収拾したかたちである。それで今回の辞任劇の真相とは何だったかと言えば以下の横峯良郎参院議員の言葉が本質を捉えている。

「執行部に反発され、『おれがボスなのに聞いてくれない』と2日間ぐらいスネてただけ。『恥をしのんできた』といていたが、おれの（賭けゴルフ疑惑の）スキャンダルよりはマシだよ」

つまり、小沢一郎は執行部で連立構想を展開したが、それが受け入れられなかったので、私の言うことを聞かないなら、皆で勝手にやればいいと、辞任を表明したのである。

この小沢一郎の態度は境界性人格障害や、自己愛人格障害の人が示す価値引き下げ（『相手の価値を貶め、過剰に低く評価すること』）の行動傾向によく合致している。

自己愛性人格障害

- ・『他人に否定されると混乱し、対象に攻撃、人間関係の切り捨て、排除を行う』
 （はてなダイアリーより引用抜粋）

これは幼少期の誇大自己への固着によるもので、周囲（人や環境）が自分の思い通りになると理想化してそれを賛美し、思い通りにならないとその周囲（人や環境）の価値を引き下げて、過剰に低く評価し、切捨て排除を行うという心的防衛機制である。

自分が宇宙の中心におり、何でも思い通りに動かしてきた人間においてはこのような誇大妄想感を抱くものであり、現実の反対者に出会うことによってその妄想が破られそうになると、相手を否定し切り捨てるのである。これは常に小沢一郎が自民党内で行ってきたやり方であり、竹下登や金丸信などの権力者の庇護の下で、権力を振るってきた小沢はこのような太古的な誇大自己イメージを持つに至ったと思われる。それが野党に下野して民主党内で自分の意見が通らなかった時にこの彼の持病とも言える症状が顕在化して、一時的な自己愛的憤怒が生じ、自分の言うとおりにならない人々を切り捨てて、自己愛的誇大妄想の中に逃避しようとしたのである。従って、横峯議員の言葉は単純に本質を捉えている。

しかし、小沢一郎は母親との関係が密接であり、彼の固着点はもっと早期の幼児期に遡るかもしれないのであるが、その辺りの詳細は分からない。(つまり、早期の母子関係において母親が彼の自己愛的万能感を満たしすぎて、それが妨げられることで他者の存在を徐々に認知していくことになるフラストレーションが足りなかったのかもしれないといえる)

党内の不穏なムード残る 民主議員の反応

11月7日 21時13分配信 産経新聞

7日に開催された民主党両院議員懇談会で、普段の豪腕ぶりを封印し、平身低頭で辞意表明について釈明した小沢代表。続投は正式に決まったものの、党内の不穏なムードが完全に払拭(ふっしょく)されるまでには至っていない。

懇談会では、小沢氏が「総選挙を必ず勝利する」と改めて抱負を述べると、「よし」という声と拍手が上がったが、一部の議員は腕を組んだまま。中堅議員の一人は「説明があいまい。これでは支持者を納得させられない」と厳しい表情を崩さなかった。

終盤、小沢氏の続投に多くの議員が「異議なし」と連呼して会場は熱気に包まれかかったものの、仙谷由人衆院議員が手をずっと挙げたことで会場は静まり返った。「この熱気と、国民の感性とでは相当ギャップがある。党は深刻な危機にある」。

懇談会は「がんばろう」の三唱で締めくくられたが、小沢氏の「辞意」について批判していた枝野幸男衆院議員は硬い表情で会場を後に。報道陣には「国民の皆さんにご理解いただけるよう頑張る」というせりふを何度も繰り返した。

一方、末松義規衆院議員は「力強い言葉をもらい、雨降って地固まるという感じ。思いを込めた説明で一緒に頑張ろうという気になった」と理解を示した。

横峯良郎参院議員は「執行部に反発され、『おれがボスなのに聞いてくれない』と2日間ぐらいいスネてただけ。『恥をしのんできた』」といていたが、おれの(賭けゴルフ疑惑の)スキャンダルよりはマシだよ」と笑っていた。

この小沢一郎の自己愛人格性(ナルシズム)は大阪大学教授の中西 信男が著書『大ナルシスト論』の中で取り上げており、彼がナルシストであるという評価は存在するのである。

しかし、ナルシズムに至るまでの過程には性格傾向から病理レベルまで、あらゆる段階が存在する。また自己愛は誰もが持っているものであり、健全な自己愛の発達ラインがあり、その固着の程度が軽く病理レベルを示さない場合には、あまり注目されることはないのである。

ジョーティッシュのロジックでは彼は現在、サディサティにあり、トランジットの土星は獅子座の13度付近を運行して、出生の月に徐々に接近している。サディサティの時期は人が身边から離れていって孤立する時期であるが、現在の彼も民主党内で孤立して、求心力を失いつつあるのが分かるのである。

然し、獅子座の月にトランジットする土星はリーダーシップの責任を負わせるようである。

土星は大衆を表し、この場合、民主党議員や民主党を支持した日本の国民を表している。

自分の意見に周りは従うという誇大自己を守ろうとして、民主党議員や日本国民への責任を放棄しようとした小沢一郎に対して、土星は簡単には辞めさせなかったようである。結局、彼自身がおのち、辞意を撤回したときに、低姿勢で、涙目を浮かべながら、釈明をしたのを考えるとトランジットの土星の影響の中にいる時期なのである。



そして、トランジットの土星は太陽にアスペクトしており、土星が太陽にアスペクトすると、大衆から批判を受けたり、その人の権威に対して、失墜が起こり、自信の喪失に繋がるようである。(ポール・マンレイ)

彼は通常、公の場では謙虚に振舞ってみせるのだが、それはもともと彼は太陽が土星に緊密に接合しているからである。目立とうとして威張りたい欲求を自制し慎重に振舞う様を見せるのである。公の場で心臓病を抱えているため、激務に耐えられないと発言するのはおそらく本当なのであるが月から10室で太陽(心臓)と土星(慢性病)が接合しているからである。

先日、来日したポール・マンレイ氏によれば、ある人が批判を受けているとき、大抵、太陽に土星などがコンジャンクトやアスペクトしているそうである。その実例として、最近、話題になっていた亀田父こと、亀田史郎氏のチャートの例(次ページ参照)を挙げている。

小沢 一郎 Ozawa Ichiro

現在、太陽にトランジットの土星がアスペクトしており、彼は反則の指示によって、マスコミ、視聴者、ボクシングファンから猛烈な批判を受けて、倫理委員会からセコンドライセンス無期限停止を受け、そして、その後、協栄ジムを辞職しボクシング界での一切の活動を行わないことを宣言している。

ポール・マンレイ氏は、おそらく彼は牡牛座ラグナであり、現在、彼が自分の居場所である共栄ジムを追われて居場所を失っている理由に4室を土星がトランジットしていることを挙げている。

Kameda Shiro May 22, 1965
 Time: 12:00PM Zone: 9:00 DST: 0
 hyogo
 Longitude: 134E41 Latitude: 34N48 CurPer: Ju/Ra/Mo
 Lahiri Ayanamsa: 23:22 365.25 Day Year

	Me 10:30	Su 7:28 Ju 13:24 Ve 17:58 Ra 20:30	
Sa 22:44			
Mo 21:02			As 10:57 Ma 20:51
	Ke 20:30		

As 10:57	Le	Vimshottari Dhasas
Su 07:28	Ta	Mo May-22-1965
Mo 21:02	Cp	Ma Feb-11-1967
Ma 20:51	Le	Ra Feb-11-1974
Me 16:30	Ar	Ju Feb-11-1992
Ju 13:24	Ta	Sa Feb-11-2008
Ve 17:58	Ta	Me Feb-11-2027
Sa 22:44	Aq	Ke Feb-11-2044
Ra 20:30	Ta	Ve Feb-11-2051
Ke 20:30	Sc	Su Feb-11-2071

Su	Sc	Ju	Ve
			As Me Ra
Ke			Me
		Ma	

小沢一郎のチャートでもこの太陽の配置が共通しており、彼は現在、政治献金で10億円相当の不動産を購入して、それが小沢一郎の個人名義であることなどをマスコミから激しく批判されており、自身の推進した連立構想を幹部から否定されたため、逆切れして辞任表明をして、さらに黨員や国民から無責任と批判を受け、リーダーシップや党首としての立場を失いかけたのである。

この逆切れしたのがポイントであり、太陽が弱かったり、傷ついていると内心自信を喪失しているため、表面上は返って傲慢になるのである。

それで小沢一郎の場合は、土星が彼の自信を傷つけたため、それに抵抗して自己の尊厳を保とうとして過度に傲慢に辞任表明したのである。しかし、その後で、無責任という批判を受けて、それが未熟な態度であったことに気づいたと思われるが、執行部が辞任届けを受理しないという大人の態度を示してくれたため、小沢一郎は助けられたと言える。小沢一郎もその自分の態度が未熟だったことに気づいたようであり、「恥を晒すようだが」と言って辞任表明を撤回したのである。

(資料1)

【小沢氏あいさつ詳報】(1)「国民におわび」

民主党の小沢一郎代表は7日午後、両院議員懇談会で「辞意」を撤回し、「国民にお詫(わ)びしたい」と謝罪した。冒頭発言の詳細は以下の通り。

小沢一郎民主党代表「このたび、党首会談をめぐりまして、国民の皆様、民主党の支持者の皆さん、党員の皆さん、同僚議員の皆様にご迷惑をおかけしたことを、まず、心よりお詫び申し上げます。そして、皆様のご叱正をいただき、2日間沈黙考、この体にもう一度鞭(むち)を入れ、来るべき衆議院の総選挙に、私の政治生命のすべてを賭け、皆さんとともに全力で戦い抜き、必ず勝利する決意を致した次第でございます」(拍手)

「もう皆様ご承知の通り、いまだなお不器用で、口下手の東北気質のままでございます。従いまして、どうしても説明不足になります。繰り返しますと、それが今回の混乱の一因になったのではないかと考えております。当初から、国民の皆様、党員、同僚議員の皆様は私の思いを打ち明け、丁寧に説明をするべきではなかったかと考えを致しております」

「本日は、国民の皆さん、党員の皆さん、同僚の議員の皆さんに、私の思いを率直に語ろう、そう決心してこの場に参りました。私は14年前、自民党を離党して以来、ひたすら政権交代可能な二大政党制を確立して、日本に議会制民主主義を定着させ、そして国民のための政策を実現する仕組みを作り上げることを目指して参りました。それが、私のこの14年間の唯一の行動原理であり、今も、そして将来も、私の政治生活が終わる日まで、それが変わることはありません」

「であればこそ、次の総選挙で民主党政権を実現させなければ、本当に死んでも死に切れない。そういう思いで必死であります。幸い、民主党は先般7月の参議院選挙において、国民の皆様から参議院の第一党という、極めて重い地位を与えられましたが、実は私はその大勝利の瞬間から、私自身の中で2つの思いが高くなって参りました」

【小沢氏あいさつ詳報】(2)「総選挙は甘くない」

小沢代表は民主党の両院議員懇談会のあいさつで、「党の現状への危機感を毎日感じていた」と明かした。

小沢一郎民主党代表「1つ目の思いは、次の衆議院総選挙では、何としても必ず勝利し、絶対に民主党政権を樹立しなければなりません、特に参議院選挙の勝利後の楽観的な考え方では勝利はおぼつかない、という危機感であります」

「民主党政権樹立のためには、前回の3倍もの議席を小選挙区で勝つことが絶対の条件であります。その厳しい現実を直視しないで、総選挙に勝利することはありえない。総選挙は参院選勝利の余勢を駆って、勢いだけで勝てるほど甘くはありません。正直に申し上げて、参議院選挙での全国遊説では、各地で多くの支持者から『日常活動をもっとやれ』という厳しいご指摘をいただいて参りました。私たちは自民党に負けない活動をし、そしてもっともっと、国民の皆さんの理解と支持を得て、強くならなければなりません。それが、総選挙勝利の最低条件だと思います」

「次の総選挙は私たち民主党にとって、また、私たちを支持していただいている多くの国民の皆さんに対し、敗北は許さ

れない決戦だと思っております。その責任の重さと、党の現状への危機感を毎日感じて参りました。もちろん、次の総選挙はあらゆる意味で私にとって、最後の一戦であることはいうまでもありません」

「先ほど、申し上げたもう一つの思いは、衆議院では、依然として自民党が圧倒的多数を占めている、いわゆるねじれ国会において、私たちが参議院選挙でマニフェスト（選挙公約）で約束した国民の生活が第一、というこの政策を、どうやって実現するかということでもあります。参議院の同僚議員が一生懸命努力して法案を作り、そして、今日もその努力によって、幾多（いくた）の法案を可決して、衆議院に送られることになっておりますが、ねじれ国会では、年金改革、子育て支援、農業再生を始めとする民主党の主要政策を、このままでは成立させることが困難であります」

「それで、本当に国民の皆さんにお許しいただけるだろうか。内外の情勢が切迫している今日、次の総選挙に勝つまで、ねじれを解消するまで、お待ちいただきたいと言いつけられるのかどうか。実際に臨時国会が始まると、国会の責任の半分を担う民主党の代表として、その思いが日に日に深くなって参りました」

【小沢氏あいさつ詳報】(3)「あのとき...と後悔」

小沢氏は両院議員懇談会の冒頭で「あのとき、総選挙の必勝に向けてがんばろう、とまとめればよかった」と述べ、2日の民主党緊急役員会の自らの運営の仕方を悔やんでみせた。

小沢氏「この2つの課題を同時に解決する方法はないものだろうか。自民党との政策協議で（民主党の）『国民の生活が第一』の政策が取り入れられ、場合によっては政権の一翼を担えば、私たちの主要政策が今、実現ができる。また政権担当能力も目に見える形で国民に示すことができる。そして、日常活動を補うことができ、総選挙で勝つ可能性が高まるのではないか。そう考えました」

「福田総理から党首会談を呼びかけられ、政策協議の大前提である安全保障政策で、総理が最大限の譲歩を示し、最後に民主党との連立政権樹立を要請された時に、私は2つの課題を同時に解決する方法かもしれない、そして、政策協議に応じたらどうかと考え、役員会で提案致しました」

「しかし、役員会では政策協議なんかに応じないで、あくまでも総選挙の勝利によって政策実現を目指すとの意見が大勢でありました。私はそれを受けてただちに福田総理に連立政権はもちろん、政策協議を受け入れることはできないと回答いたしました」

「今になって思うと、あの時（緊急）役員会で、もはや政策協議や連立という方法をとらず、今後日常活動を強化して、総選挙での必勝に向けて頑張ろう、私もその先頭に立つと、とりまとめればよかったのかな、と振り返って反省しております」

「しかし、その後、いろんな憶測や誤解によりまして、混乱が生じたことについて、けじめをつけなければいけないという私自身の思いが先に立ちまして、代表の辞職願を提出致しました」

【小沢氏あいさつ詳報】(4) 完「本日が再スタート」

小沢氏は、7日の両院議員懇談会の冒頭で「本日が再スタート」と、民主党の態勢立て直しを急ぐ考えを強調した。

小沢氏「(辞職願提出も)また、不器用なやり方であったように思っております。しかし、それにもかかわらず、菅直人代表代行、輿石東代表代行(参院議員会長) 鳩山(由起夫)幹事長をはじめとして、執行部の方々、衆参両院の同僚議員の皆様が率先して、この混乱を収めてくださったことに対し、本当に心から感謝申し上げます」

「みなさまのご厚意に対し、私も新たな覚悟をもって応えなければなりません。私にもう一度代表を続けさせていただき、最後の決戦に当たらせていただきたいと思います。どうか、皆様協力よろしくお願い致します。(拍手)本日を再スタートの第一歩とし、直ちに菅代表代行、輿石代表代行、鳩山幹事長らとともに『衆議院選挙対策本部』を立ち上げ、目前に迫っている総選挙に向け、衆参一体の協力態勢を確立致したいと思致します」(拍手)

「1年半前、私は代表就任するに当たり、政権交代を実現するために、まず、私自身が変わらなければならぬとお約束をしました。その約束を改めてかみしめ、総選挙に向けて死にものぐるいで戦う決意を致しております。みんなで、心を一つにして、総選挙の勝利と政権交代に向け頑張ろうではありませんか」(拍手)

「最後に国民の皆様にかかれましても、政権交代を実現して『国民の生活が第一』とのわれわれの政治を実行するために、今後とも一層のご理解とご支持を心からお願い申し上げます。ごあいさつと致します。ありがとうございました」(拍手)
(終わり)

(Digital Sankei Inc. より引用抜粋)

(資料 2)

「私は不器用…」続投宣言の小沢氏、“豪腕”は封印？

11月7日 21時12分配信 産経新聞

「私が不器用で…」民主党の小沢一郎代表は7日の両院議員懇談会で、自らの説明不足を素直に認め、目を潤ませながら続投を宣言した。満場の拍手で迎えられたものの、懇談会終盤では議員から異論も飛び出すなど、しこりを残しての再出発。一方、“出直し”記者会見では、突然の辞意表明について「張りつめていた気力がブツンした」と説明、心身の重圧があったことを明らかにした。

200人を超える民主党議員が東京・永田町の民主党本部で一堂に会した両院議員懇談会。小沢氏は時間通りに姿を現し、議員らに何度もお辞儀をすると、みけんにしわを寄せ、険しい表情で代表席に座った。

「小沢代表が新たな気持ちで代表を続投する決意を固めた」。鳩山由紀夫幹事長の経過報告を受け、議員の間からは「よし」と声が上がった。続いて、登壇した小沢氏。一礼した後、「みなさんに多大な迷惑をかけた」と謝罪から切り出し、「次期総選挙で勝つ」と代表続投を正式に宣言。大きな拍手がわき上がると、一歩下がって深々と頭を下げた。

「政権交代可能な2大政党制ができなければ死んでも死にきれない」「総選挙は甘くはない」…。小沢氏はときには涙声で話し、いつもの豪腕ぶりは影を潜めた。

一方で、党首会談の説明が不足していたことについては「不器用で口べたな東北気質のままです」と説明。議員らの笑い声が響くなか、「そんなことはない」と合いの手が入る場面もあった。

始終神妙な表情を作っていた小沢氏だったが、渡辺恒三衆院議員が「38年の付き合いになるが、あんなに真剣に私の話を聞いたのは初めて」「話が下手なのは治らない」と皮肉を言うと、初めて大げさな笑顔を見せた。

引き続き行われた記者会見。問題となった「力量不足」発言やマスコミの捏造(ねつぞう)発言などについて厳しく追及されたが、明確な回答をせず、一部については「誤解を招いた」と撤回した。突然の辞意表明については「がんばっていた気力が途切れたというか、ぶっつんしたというか」と話し、党首会談の重圧が原因の一つだったことを明かした。時折、遠い目をするなど、眼力に鋭さは見られなかった。